4江戸の街道探訪　第７回

■図1：東海道箱根越え

東海道（５）街道の難所

小夜の中山、宿

* 大井川を渡る。すると眼前、山登りが待っている。しばらく登ると、５１軒の旅籠屋が山肌にへばりつくようにある。金谷の宿。しばし、休憩を取って、重たい腰を上げる。急峻な峠道。上り坂、下り坂が続く。そして最後に長く、急激な下り坂（小夜の中山）を過ぎるとようやく日坂宿に着く。小夜の中山は箱根に次ぐ東海道の難路である。
* ともかく国貞が東海道名所で、小夜中山を画いた光景には驚かされる。江戸を立って西国に帰る大名行列が急峻な小夜中山の崖道を降りる姿が描かれている。絵の右辺の行列はまるで墜落しそうだ。殿様と廻りを囲む家来はすでに急坂を降りており、弓だの鉄砲だのを抱えた家来が夜泣き石を囲んでいる図である。大きな丸い石を夜泣き石という。昔ここで妊婦が殺され、以来、夜になると泣き声が響いた。妊婦の霊を慰め、この大きな丸い石に、南無阿弥陀仏の文字が刻まれる。この時、生まれた子が成人し、母親の仇を討つという話。いかに寂しい道であったかを物語る。
* 絵の背後に富士が描かれ、大名行列一行の表情がこの坂を降りてくる光景だとわかるが、これが逆に江戸に向かってこの坂を登るとなったらえらいことである。小夜の中山を越え、さらに険しい山道を乗り越え、ついに眼下に広がる大井川を見たとき、旅人は愕然たる思いを抱いたに相違ない。特に大井川の川渡りは難事だったからである。
* 日坂宿に向かう、尾根伝いの険しい道、小夜の中山は、広重を始め、多くの画人が描いているが、昔、此処を通った人の和歌や俳句も多く残されている。古くは西行法師の「年たけてまたこゆべしと思いきや、命なりけり小夜の中山」（年老いてからこの山を登ろうという気すら起きまい。小夜の中山を越えることは、命を感じさせる）。
* 西行のように、昔、京の都から関東に行くには鈴鹿峠、小夜の中山、箱根という3つの難所を越えねばならなかったという話である。

■図2：東海道名所風景６６：国貞：小夜中山：険しい崖道を降りる大名行列一行。その先は、日坂宿。

箱根越え

* さあ、その箱根越えである。「箱根8里は馬でも越すが….」の馬子唄にある箱根8里とは、小田原宿から箱根宿までの4里と、箱根宿から三島宿までの4里を指す。言うまでもなく箱根越えは東海道屈指の難所である。
* 小田原宿を出た旅人は早川沿いに敷設されている東海道を西へ。道はごく平坦な登り。快適な旅路である。すぐに、かまぼこで有名な風祭（鈴廣）に着く。ここを通過し、前方に箱根の山々を感じながら街道は次第に早川に近づく。滔々と流れる早川の流れを見ながら歩くともうそこは箱根湯本である。ここで早川に架かる三枚橋を渡ってしまう。箱根湯本のゆるり傾斜の坂を上がっていくと、広大な北条家の菩提寺早雲寺にぶつかる。東海道はこの寺のすぐ前を通過する。箱根湯本の町並みを眼下に道をどんどん登っていく。湯本の一里塚を過ぎると道は蛇行し、急激な坂を登る。猿沢の石畳道、観音坂の石畳道。しばらく行くと葛原坂。街道は早川の支流、須雲川沿いに登っていく。ややあって女転ばし坂。この坂でご婦人が落馬し亡くなったと言われる。さらに割石坂が待っている。この坂を越えるとしばし、普通の山道が続き畑宿の道祖神が立っている。寄木細工で有名なに入る。畑宿は小田原と箱根宿の間宿。一服、休憩した後、畑宿を出ると、すぐに畑宿一里塚がある。街道は蛇行しながら登っていく。急坂の西海子坂が待っている。立派な石畳が敷かれている。道は蛇行しつつ、今度は樫の木坂を登る。しばらく行くと猿滑坂。ここは割合なだらかな石畳坂である。
* 辺りは昼なお暗き鬱蒼とした森の中、石畳の道をひたすら登る。昼間でも昔の人はさぞかし心細かったことだろう。江戸初期には、石畳は無かった。このため旅人は雨など降ると泥濘に膝まで浸かって動けなくなることもあった。幕府は､直ちに石畳工事を始める。その後、将軍上洛の度に石畳は整備されている。
* 急な追込坂を上がる。登り切ってちょっと行くと有名な甘酒茶屋がある。旅人にとっては恵みの茶屋。正面の屏風山を見上げながらの一服は、代え難き悦楽であったに相違ない。再び重い腰を上げて昼なお暗き石畳の険しい

道を登る。突如、視界が開け、「お玉が池」が右下に見えてくる。しばらく尾根歩き。まもなく道は左に曲がり、下りに入る。木々の間に芦ノ湖がちらりちらり。やがて権現坂を下る。眼下に芦ノ湖が現れ、旅人は難行苦行の果ての箱根越えの安堵感を味わいつつ、杉並木の中を降りていく。この権現坂の光景を描いたのが広重の箱根「湖水図」である。

■図3：広重：箱根「湖水図」：大名行列が権現坂を下る、の図。左に芦ノ湖が見える。

箱根の関所

* さらに杉並木の巨木を縫って芦ノ湖畔を行くと最初に目につくのがかの有名な箱根の関所である。ここは特に「入り鉄砲に出女」を厳重に取り締まった関所として名高い。当初は、鉄砲の取り締まりが厳重に行われたが、幕府が安定するにつれ、出女の取り締まりに絞られていったようである。関所破りは死刑。江戸時代を通じて、箱根の関所破りは5件あったという。その後も関所破りに近いのがあったが「道に迷った」ことにして処理したケースが多かったという。というのは、関所役人も管理不行き届きということで、何らかの注意罰を受けるので、大事なことでなければ、これで始末をつけたと言うわけ。
* ところが、この厳格な関所を大名行列が通るとどうなるか。お白州に一列に並んでひれ伏しているのは、関所の役人の方である。行列は何事もなくどうどうと通過。一光斎芳盛の「箱根」の絵はどこか愉快である。
* 図4：東海道名所風景３７「箱根」：一光斎芳盛：関所を通過する大名行列：ひれ伏して出迎えているのは関所の役人一同

箱根宿

* そしてこの厳めしい関所を通過すると箱根宿が待っている。幕府が旧湯坂道を廃止し、新たに芦ノ湖畔に関所と宿場を設けたのが1618年。箱根宿は、小田原宿と三島宿から強制的に旅籠を移住させて造った新しい宿場である。本陣６，脇本陣１，旅籠屋36軒。

箱根夜中松明登り

* 箱根越えは、総じて昼なお暗き鬱蒼たる森の中、急峻な石畳の坂道を登るといった感じである。ところが広重は夜の暗闇の中、松明をかざしての籠登坂を描いている。題して「箱根夜中松明登り」。籠の前後に松明を持つ雲助を配し、急峻な石畳を登る籠の姿を描。夜間の、籠登り。関所の開き時間は、明け六ッ（午前６時）から暮れ六ッ（午後６時）まで。となるとこの籠は明け六ッを目指しての夜中箱根越えか。籠には侍が乗っており、家来が後についている。とにかく緊急事態に相違ない。籠の担ぎ手は疲れると松明持ちと交代する。四人がかりの早籠である。こういう箱根越えもあったのだ。

■図5：広重：東海道５３次箱根夜中松明登り

箱根宿から三島宿へ

* 箱根宿を出ると箱根駒形神社を抜け、箱根峠を登る（８７４ｍ）。峠の頂上からは、眼下に芦ノ湖が広がり、富士山が眺望できるという、まことに美しい展望が広がっている。
* 箱根峠を越えると街道はひたすら下りになる。途中、北条氏が築いた山中城（豊臣の小田原征伐で陥落、廃城）の脇をとおり、三島宿に達する。ここにも要所要所の坂道に石畳が施されていた。